

ある寡婦の夢みた風景

——井伏鱒二「遙拝隊長」——

滝口明祥

一、はじめに

井伏鱒二「遙拝隊長」が発表されたのは、「展望」一九五〇年二月号においてである。そのわずか数カ月後には朝鮮戦争が始まり、それをきっかけに日本は再軍備へと大きく踏み出していくことになる。既に前年からレッドパージが行われ、占領政策の転換は誰の目にも明らかになっていた。翌一九五一年十一月には読売新聞が「逆コース」と題した連載を開始し、その言葉は流行語となった。⁽¹⁾

そのような時代を背景として、この小説は受容されていったのだ。河盛好蔵による次のような評言が出たのも、考えてみれば当然のことかもしれない。

作者はこの元中尉によって具現されている狂信的なミリタリストに対する怒りと憎しみを、適度のユーモアをまじえながら、しかし世の権力を笠に着る人間のはいふをえぐるはげしさを表白している。⁽²⁾

「元中尉」とは、元陸軍中尉の岡崎悠一のことを指している。悠一は戦場での事故によって「気違ひ」となり、いまだに戦争は終わっていないと思っている。この小説ではそんな悠一がたびたび起こす「発作」と、それによって「こうちが、めげる」——部落にどさくさが起こる様子が描かれているのだが、河盛はそこに「狂信的なミリタリストに対する怒りと憎しみ」を見ているのである。このような見方はそれから後もかなり長い間にわたって、この小説の受容を規定していったように思われる。⁽³⁾

もちろん一方で、この小説はただ単に悠一を批判しているわけではない、という指摘もしばしばされてきた。早い例としては寺田透の指摘が挙げられる。寺田は「「遙拝隊長」をひとびとは、簡単にファッシズムの醜怪暴戾な残骸の戯画をもつてしたその風刺と取つたようであるが」とそのような見方に異議を唱え、この小説は「気違い」の軍人を批判する人間をも「決して肯定はしていない」としている。⁽⁴⁾また中村光夫も、「悠一と喧嘩してアメリカ風の民主主義を説く兵隊服の青年も、「ソ連風の云いまわしかた」

をするシベリアがえりの元曹長も、作者から苦い筆付きで滑稽化されているだけであり、村人たちも「意味を失った旧慣をただ人がするからという理由でくりかえしているだけ」なのだ指摘する。そして中村は、「戦後の数多い小説のなかで、敗戦にもとづいた、僕等の内面の混迷を、これほどはっきり造型し、生々しい実感で表現し得た作品はおそらく他にない」とこの小説を絶賛するのである。⁽⁵⁾

このような単なる「軍人」に対する諷刺に終わっていないという見方が出て来た背景としては、改稿による影響ということが考えられる。先行研究においては全く触れられていないのだが、『遙拝隊長』の初刊本である『本日休診』（文藝春秋新社、一九五〇・六）は、一九五一年九月に改訂新版が出されている。その際、『遙拝隊長』の本文に幾つかの重要な改稿が施されているのだ。⁽⁶⁾たとえば中村が言及していた「兵隊服の青年」の場面は、初刊本では次のようになっていた。

幸ひ、兵隊服の青年は膂力が貧弱であつた。後ろから棟次郎が抱きとめてみると、手足を無意味にばたばたさせ、それでも口だけは達者なものであつた。

「ぶつた斬るとは、何ごとぢや。まるで、軍国主義の亡霊ぢや。骸骨ぢや。おい村松棟次郎さん、放してください。おい放せ、村松棟次郎さん。この危急存亡のとき、わしの自由を村松棟次郎さんは、奪ふのか。」

ここで兵隊服の青年は悠一が戦時中と同じような振舞いをすることに腹を立てているのだが、改稿後の本文では、「口だけは」と

（達者なものであつた）の間に「時流に投じた言辞を弄して」という言葉が付け加えられている。改稿によつて、青年への揶揄が強められていると言える。（自由）だとか「非武装国と誓つた国ぢや」などといった科白は借り物でしかないことが断定されているのだ。つまり彼は、戦時中において「滅私奉公」などと言つていたのと同じ意識で戦後は「自由」と言つているのに過ぎないのである。そのように考えた場合、悠一のことを「軍国主義の亡霊」だと罵るこの青年が「戦鬪帽のお古に払ひ下げの兵隊服を着ておた」とされていることに皮肉な意味を読み取ることも可能だろう。もちろんそういつた青年への揶揄を改稿前の本文から読み取ることが出来ないわけではないが、改稿によつて一層、単なる軍人批判・軍国主義批判に留まらない側面が明瞭に出てきているのである。

寺田や中村の指摘以降も、この小説に対しては「戦争批判の批判」⁽⁷⁾などが指摘され、悠一⁽⁸⁾に対しても「加害者」であると同時に「被害者」であるといった評も出るなど、多角的な読みが試みられている。本稿ではそれらの論も踏まえつつ、主に「立身出世」という観点からこの小説を読み直していくこととしたい。何故なら、立身出世という近代日本を動かしてきた欲望を抜きにして悠一やその母親の行動を理解することは出来ないからだ。「立身出世」という観点を通して見ることで、この小説を単なる村やへこうちの話としてではなく、国家をも含んだ幅広い視野から考察することが出来るようになるのであり、また陸軍将校と他の国民たちとを同じ地平で捉えることが可能になるのだ。自身の立身出

世を願ひ、家庭の幸福を望んだという点においては、陸軍将校も他の国民たちと何ら異なるところは無いのである。

近年の研究が取り逃がしてきたのは、この小説が持っているアクトリアリティに他ならない。ここに出てくる兵隊服の青年や村人たちの姿は、決して過去の話ではないはずである。軍人をへ気違ひと断ずることで人々が見ようとしなくなったものは何か？——そのことについても考えてみたい。その際、改稿に関しても適宜指摘していくことになるだろう。

二、母と子の「立身出世」

〈遙拝隊長〉こと岡崎悠一は、陸軍幼年学校から陸軍士官学校を経て陸軍将校になった。戦前の日本においては、「末は大臣か大将か」という言葉からも分かるように陸軍将校になることは立身出世の重要な一経路であった。日本の軍隊においては将校と下士官や一般兵卒との間には厳然たる壁が存在しており、しかもヨーロッパ諸国の軍隊とは違い、将校になるには身分や家柄ではなく士官学校卒業という学歴が必要とされたのである。悠一はまさにそのエリートコースを歩んでいたと言える。

悠一の立身出世のきっかけとなった陸幼入学は、へ悠一が学童として優秀であり、悠一のお袋が人格者であり、模範的な一家であるために推薦されたのだとされている。この発言自体は村長や小学校長の悠一の母親に対する追従であったとしても、母親がコンクリート造りの門柱を建て一家にへ貫禄を付けていたからこそその推薦だったことは確かなようだ。悠一の父親がへ過労と貧

困による栄養不足で死んだとされていることから、この一家は「部落の中でも最下層の出」とする相原和邦の指摘を受けて、河崎典子は母親が家の大改築にまでこぎつけたことを「一大サクセスストーリー」と表現している。まさしく、悠一の立身出世に先立って、そこには母親の立身出世があったのだ。

この点に関して、木村涼子「女性にとつての「立身出世主義」に関する一考察」¹¹⁾を参照してみよう。その中で木村は婦人雑誌「主婦之友」の記事の分析を通して、女性の「立身出世主義」を三つのタイプに分けている。第一に、「縁の下出世主義」である。これは自身の代わりに夫や息子などの立身出世を支えるものであり、彼らの成功こそが自身の成功であるとされる。第二は、夫婦の協力が商売や事業の成功に結びつくという「夫婦成功主義」である。ここでは、夫と妻がそれぞれの性別分担に応じた役割を演じることが推奨される。そして最後の一つが、「擬似男性出世主義」である。これが男性の立身出世に対応するものであり、女性自身による立身出世を指す。ただし、このパターンにはある条件があると言う。すなわち、「幸福に結婚して、夫の収入を基盤に主婦の務めを果たすという、女性のライフスタイルの基本形を、何らかの形ではずれざるを得なかった場合が多い」のであった。

悠一の母親の場合、夫との死別により女としての「正常」とされる生き方が困難になったために、自らの立身出世を目指したのだと言えるだろう。しかも、そんな母親に対する村人たちの視線は決して温かいものではなかった。悠一のへ発作に気付いた当初、へ部落の人たちは、こんな気違ひの発作が起るのは、悠一が南

方の戦地で悪疾に感染した結果だらうと云つてゐたが、そのうち

に「あの病氣は親ゆづりの梅毒のためだといふ臆説も出て、これが刺戟的なせるか一時は可成り有力な説になつてゐた」と言う。以下の叙述はなかなか意味深い。悠一の父親については「悠一が小学校にあがつた年に亡くなつたが、死因が敗血症であつたことに疑ひはない。過労と貧困による栄養不足のためであつた」と言うのだから、「親ゆづりの梅毒」と父親とは関係が無いことになる。そして「海岸町の駅前にある小野半旅館といふ宿屋の住み込み女中になつた」悠一の母親の「稼ぎが、案外ばかりにならないのであつた」と語り手による説明は続くのである。これらの叙述が示唆しているのは、母親による売春行為であらう。もちろんそれが本当にあつたことかどうかは定かでないが、もし本当であつたとしても父親の死後のことであるならば悠一に「親譲りの梅毒」が出るはずはない。つまり部落内においては、あたかも父親の死の以前から母親の行状に問題があつたかのように盛んに噂されていたということだ。たしかに「刺戟的」な説である。そして母親に関するそのような疑惑は、戦後になつて突然出てきたものではないだろう。母親が「母屋も納屋も、瓦葺きの棟に改造」し、「コンクリート造りの膨大な門柱を立てた」のも、そうした村人たちの視線と無関係ではないと思われる。白石喜彦は「寡婦であるからといつて侮りをうけないよう、母親は村の人々に対して身構えている」と指摘しているが、まさに母親は村人たちの心ない視線に対して「貫禄」をつける必要があつたのだ。そして母親の必死の努力は成功した。「近所の人たちも一もく置かないわけに行

かなかつた」のである。

ただし、「親ゆづりの梅毒」という噂が戦後になつて出てくることから分かるように、決して村人たちは母親に対する見方を根本的に改めたわけではなかつた。しかし悠一の母親は、どうもそれをよく認識できていなかったのではないか。たとえば、村長と小学校長から悠一の陸幼入学を薦められたとき、「お袋は忽ち感激してしまつた」と言う。

村長たちが帰つてから、お袋は橋本屋に出かけて行つて一部始終を喋つた。その後で「ほんとに、今から思ふと、門柱をこさへといつて、よかつたですらあ」と云つた。しつかり者の女でも気が上ずつてゐたものだらう。

改稿後の本文では削除されているが、改稿前の本文ではこの後「下らないことを云つたものである」という一文が続いていた。母親に対する揶揄は改稿によつて後退しているが、へよかつたですらあ」という母親の科白は戦後の悠一の姿を知っている読者には皮肉に響いてもくるだろう。しかし、この時の母親にとつて陸幼入学はまさに福音以外の何者でもなかつた。自身の立身出世を成し遂げた母親が次に願つたのは、「正常」な母親にとつての立身出世——子どもの立身出世だったのだから。

三、コンクリートの門柱

しかし、授業料そのほか全て官費制だつた陸士とは違い、陸幼は月額二〇円の納金制であつた。それは中学校に通学する場合よりも高い出費であり、悠一の母親にとつても決して楽な負担では

なかつたはずである。事実、悠一はその時、中学校ではなく高等小学校に進んでいたのだ。だが、中学校——旧制高校——大学と続いていく立身出世の経路と異なり、軍隊の場合、陸幼さえ出せば後は費用はかからず、しかも就職も保証されている。母親は悠一が陸軍将校になる日を夢みて、かなりの無理をしても進学させたのだらう。では、そのような母親の期待を受けた悠一の側はどうだったのだらうか。再び木村前掲論文から引用する。

そうした母の献身が、息子たちをして出世にかりたてる重要な牽引力となる。(三)母親は息子にとって報いるべき絶対的な存在となつていく。特に母が未亡人で女手一つで苦勞して育ててくれた場合は必ずといつていいほど、それが激しい発奮の動機となる。この場合、息子が母親の恩に報いようとする気持ちは、母親の嘗めた辛酸に同一化するルサンチマンの一形態を伴つていると考えられる。

このような母子家庭の息子が立身出世することによつて苦勞した母に孝行するという話は、戦前の日本において強力な「物語」として機能していたのではないか。例えば竹内洋は「尋常小学校読本巻の六」(明治二十年)に載つている「立身の宴会」という次のような話を紹介している。⁽¹⁵⁾

「一人のやもめあり、家甚だ貧しく、僅に糸を紡ぎて暮しを立てたる程なりしが、其子をば日々学校に通はせたり。されば此子は、母の志を徒にせず、勉強せしかば、大いに立身して、遂に、上等社会に立つに至れり」。この息子があるとき多くの人を招待して宴会を開いた。座敷に粗末な糸車が置いて

あつた。招かれた人は不審におもひ、質問をする。息子は、母がこの糸車で糸を紡いで自分を学校に通わしてくれたのである、と答え、老母を宴会の場へつれてきた。「かくの如きよき子を持ちて、学問をさせ、終に、よき仕合になりたる老母の心は、いかに嬉しかりしことならん」

「いかに嬉しかりしことならん」。まさに悠一の母親が夢想したのもこのような状態であつたに違いない。しかも悠一の母親は「家つき」であつた。栗坪良樹が指摘しているように、「わが名をなさん、わが家を興さん」という母子家族の名分が悠一に背負わされていたはずである。⁽¹⁶⁾このような母親の願望は、また当時の国策とも合致していた。戦前戦中期の国定教科書を分析した山村賢明は、太平洋戦争下で使用された教科書に「母」への価値付与的な言及がそれ以前とは群を抜いて増加していることに注目し、「戦争体制への母の精神的動員がうかがえる」としている。⁽¹⁷⁾ こうした中であつて、悠一とその母親こそはまさに成功のモデルケースであつたらう。実際、悠一は母親の期待によく応え、陸軍中尉にまでなつた。彼の立身出世は、きわめて順調だつたのだ。

——戦場での事故によつて「気違ひ」となるまでは。

しかし、一見立派に自身の務めを果たしているかみえるそれ以前の悠一においても或る種の裂け目のようなものが見えていることに気付く。一つは、演芸大会があるたびに歌つたという笹山童謡が挙げられる。それに注目し、悠一の「幼児性」を指摘するのが鶴田欣也である。⁽¹⁸⁾ 高等小学校を出てすぐ陸軍幼年学校に入るために故郷を出た悠一にとつて、故郷とはどのような存在だつた

のだろうか。笹山童謡は「草刈に来てみたが、刈った草が全部籠からもれてた。仕方ないから、その空籠を持って帰ろう」という不毛な行為を歌った歌である。出征の南方行きの輸送船の中で「往んでやろ（＝帰ろう）」という歌を歌ったのは偶然ではない、と鶴田は言う。さらに言えば、作品内では一貫して軍隊用語＝標準語で話す悠一が唯一方言を口にするのは、この笹山童謡を歌うときだったのだ。そこに、悠一の抑圧されていた故郷や母親に対する希求意識を見ることが可能だろう。

そしてもう一つは、(遙拝隊長)とあだ名されるほどだったという遙拝である。遙拝の対象とはむろん天皇に他ならず、遙拝に熱心であるということは一般的には天皇に対する忠誠心の高さを示していると考えられる。戦前の陸軍将校について詳細な研究を行なった廣田照幸は、将校が天皇制イデオロギーを「内面化」する際の動機としてそのエリート意識(天皇への「近さ」)を挙げている(廣田前掲書)。だが、周囲から呆れられるほど遙拝を繰り返していたという悠一には、そうした一般的な説明に収まりきれない過剰さが孕まれているようだ。

悠一がまだ小学校に上がったばかりの頃に(宿屋の住み込み女中)になったという母親が悠一に会える機会は、決して多くはなかったに違いない。そして、たまに会えたとしても周囲の人間を見返すために必死だった母親は、我が子に対して充分な愛情を示すだけの余裕を持ち得なかったと考えられる。悠一にあるのは「父親喪失に対する絶望感」(鶴田前掲論文)よりもむしろ母親に対する希求意識だったのではないか。

戦時中での場面で示されるのは遙拝や訓辞を繰り返す悠一の姿のみであり、(雑事では感情を外に現はさない)という悠一が自身の心情を語る場面は無い。そして、そうした悠一の内心は部下の兵卒からも理解されていなかったのである。友村が悠一のために軍鶏を取るの嫌だと言ったことを横田准尉から告げ口されたときも、悠一は(徹頭徹尾、むつつり屋をきめこんであた)と言う。のちに悠一は(贅沢なものちやのう、戦争ちゆうものは)と言った友村を殴るのだが、それは語り手によって(軍鶏の一件を根に持つてゐたせゐでもなささうであつた)とされている。だが同時に語り手は、(当人の友村や、傍で見てゐた兵隊が、どんな風に解釈したかは別問題である)と付け加えることも忘れない。しかも、このようなコミュニケーション不全ともいえる悠一の在り様が軍隊に入ってから始まったことだとは考えにくいのだ。遠田勝は「ことあること」に遙拝と訓示を部下に強いたというエピソードからは、⁽¹⁹⁾社交的で利発な少年の姿は浮かび上がってこない」と指摘している。そんな少年にとつて立身出世とは、(がむしやら)になつて働く母親の視線を自身のほうへ向かせる手段であつたのかもしれない。

立身出世物語のクライマックスは、功成り遂げた主人公が故郷に錦を飾り、祖先の墓参りをする場面である。日本の立身出世が「家」意識をその背景として持っていることは、しばしば指摘されるところである。家名や家運の回復が立志の主な動機ともなる。この「遙拝隊長」にも墓場の場面が登場する。だが、それは通常の立身出世物語とは著しく様相を異にしているのだった。

発作を起して家を飛び出し、行方知れずになつた悠一は墓地に來ていた。へ悠一は山の中腹の共同墓地で、墓の列の間を歩きまはつてゐたのである。彼は墓を一つ一つベルトで撲りつけながら歩いてゐた。改稿前本文では以上で視点が切り替わるのだが、改稿によつて以下のような叙述が加えられた。

墓石を兵卒と見做したやうな意気込みで、ぴりぴりしりと撲りつけて、口のうちでつぶやいてゐた。

「ピンタを喰らへ、貴様も喰らへ、貴様も喰らへ。ピンタを喰らへ、貴様も喰らへ……。」

ここで示される狂気の異様な迫力の背後にあるのは、母親を囚へ、また自身を抑圧した「家」意識への悠一の反逆であるとも考えられるだろう。作田啓一は立身出世主義を日本社会における何らかの「適応」ないしは「同調」として捉えている。つまり、立身出世の動機は、「個人的卓越の野心」だけでなく、家族などの「第一次集団の社会的期待」や、「より広い共同生活の秩序」に同調しようとする意識に源を発しているということである。悠一の母親の、村人たちを「見返してやりたい」とは、つまりは「認められたい」ということだ。しかしそうやって頑張れば頑張るほど、母親は共同体の中で浮いた存在となつていつた。海岸町に出てへばかにならない稼ぎを得、あまつさえコンクリートの門柱まで建ててしまふ寡婦の姿は、村人たちにとってはたしかに讃嘆の対象であつただろうが、一方では異質な存在でもあつたはずだ。或いは河崎前掲論文の言うように、共同体を破壊してしまふ危険因子にさえ見えたりもする。

そして、悠一にとつて立身出世とは母親に認められることと同じであつたし、そのために軍人としての職務を果たすのは「国家」という「家族」に認められることでもあつた。しかし同様に彼もまた異質な存在でしかなかつたのである。へ軍隊でも、悠一の滅私奉公の口ぶり身ぶりは大げさにすぎた筈」という村人たちの噂は、正鵠を得ていたのではないか。へ「選擧隊長」というあだ名が、まさにそれを証している。

へ「ほかの小隊や中隊の兵隊」が悠一の部隊にへ「選擧部隊」という通称をへ思ひついでくれた」とき、悠一はへ「有名になつた故に」より一層へ滅私奉公の精神を集中して選擧しなくてはいけない」と言つたとされている。贅辞に隠された揶揄に気付いている様子は少しも見えない。そして同じことは、母親についても指摘できるのだ。村長から鉄の釣瓶繩についてへ「見えすいたお世辞」を言われても、へ必要以上に水汲みをしてへしまふ母親であつた。表面上は寡婦の立身出世を褒め称える村人たちも、その裏には複雑な感情を潜ませていたように思われる。だが、そうしたことに彼女はやはり気付いていなかったのだ。

追い求めようとすればするほど、そこから逸脱してしまふ。へ杉垣や四囲の風景に対して、ちつとも調和のない景色」であつたというコンクリートの門柱とは、この母子の姿そのものなのである。そして、立身出世によつて部落の中でも一目置かれる存在となつていたという彼らは、悠一の戦場での事故および敗戦によつて再びへお袋ひとり倅ひとりの貧世帯」へと引き戻されたのであつた。

悠一が墓場で四人の墓参者たち——橋本屋、棟次郎、新毛、与十——に饅頭を無理やり突っ込んでいる時に、悠一の母親がやってくる。そして、悠一に向かって「往のうや〜（＝帰ろう）と〜嘆願する。しかし悠一は「知らぬ顔」であった。言わば悠一は「帰つて」いないのだ、——南方行ききの輸送船から、戦場から。彼が追い求めた母親はもはや立身出世を彼に強要することもやめ、まさしく「母」としていま彼の目の前に立っているというのに。

四、「庶民」の戦中と戦後

遠田前掲論文が述べているように、この墓参の場面で滑稽なのは「（気違ひ）の悠一ではなく、四人も揃っていないながら（気違ひ）の言いなりになっている村人たちのほうだろう。『発作』を起こした悠一に出会ったとき、彼らは次のように嘸き合う。へどうするかのう。へせつかく与十が墓参したのやから、けふのところ、穩便にしておくか。彼らが悠一に抵抗しないのは「穩便にしておく」——「へこうち」を「へめげ」させないためなのであった。

その中で中心的な役割を担うのが橋本屋である。悠一が去った後の「へあいつ、怖るべき骸骨だね」という与十の発言は四人の悠一に対する反感を過剰に起こさせる恐れがあった。言うまでもなく、それは「へこうち」を「へめげ」させることにながりがかねない。そこで橋本屋は「へしかし、訓示はうまいもんぢや〜」と言って、その気持ちを「へぐらかそうとする。しかしそれは「へばかな。みんなあんなものだ」と与十に反発されてしまう。すると今度は「大森さんの分家の娘さん」の話を持ち出すのである。

「ところで、稲田村の、大森さんの分家の娘さんは、よい娘ぢやのう……」と、橋本屋さんが云つた。あと、何か云ふのかと三人は待ち受けたが、橋本屋さんは黙り込んでしまつた。それがきつかけで、四人とも黙つて坂道を降りて行つた。下草刈りの行きとどいた疎林のなかに、曲りくねつて通じてゐる坂道である。木の間がぐれに村道が見おろされ、悠一のうちの瓦屋根も杉垣も、コンクリートの門柱も見おろせる。いつもは門柱のてつべんの色硝子が、赤く見えたり青く見えたりするのだが、曇り日だと異彩を放たない。悠一とお袋が、とほとほと門口にはひつて行くのが見えた。

話題を逸らそうとした橋本屋の試みは、けつきよく話が続かず失敗する。その沈黙の中で、四人は「とほとほと」家へ帰る母子の姿（＝「異彩を放たない」コンクリートの門柱）を直視せざるを得なかつたのだ。

そもそも、悠一の陸幼入学を唆したのは村長と小学校長であつた。そして、悠一が戦地から送還された時「この隣組内に将校が帰つて来ると鼻が高い」などと言つて陸軍病院から退院させたのは、近所の人たちであつた。初めのうち、悠一の言動は怪しまれていなかった。怪しまれたのは敗戦が近づいてからなのである。足の怪我に關しても最初は悠一が何も言わないのは「謙讓の美德の頭はれ」とされていたのが、敗戦後には「親の因果が子に報ふ譬へばなし」にまでなつていた。その間、悠一自身は何ら変わっていない。変わったのは村人たちのほうなのだ。戦前には「天皇陛下万歳」と叫び戦争に加担していた者たちの多くが、敗戦

を境に一斉にその身を翻したのである。だが、そこで変わったのは仰ぐ対象や言葉だけであつて、意識は少しも変わつていないのだ。戦場での悠一の姿を与十に語つた上田元曹長は、へみんな選擇居士の行きすぎが原因だよと語る。そんな上田は、戦時中には悠一のことをへ怖いだけの気持で見てゐたよという。そして、へ要領の悪い兵隊であつたという友村のようにへ明けすけに口をきくことも無かつたのである。しかしへソ連風の云ひまはしかたへを殊更にしてみせる上田には、戦時中の自身の姿を省みるという発想は少しも無いようだ。おそらく、他人から課せられた価値観をそのまま信じ込むという姿勢において、戦時中から自身が何一つ変わつていないということにも気付いていないのだから。そして村人たちが悠一をかばっているかに見えるのもへこうちへをへめげへさせないためであつて、それ以上のもではない。兵隊服の青年や与十が悠一の悪口を言うのに対してへ云はんと置けへ興奮しては、いかんへなどとたしなめていた棟次郎さえ、悠一のことをへあの凝り固まりの滅私奉公などと表現しているのである。たしかに吉田永宏のように、そうした村人たちの態度に「融通無碍なしたたかな強さ」を見ることも充分に可能だろう。彼らの口から語られるへ人間の生涯には、素通りせんければならんものが、なんぼでもあるへなどという科白にも、何がしかの眞実は含まれているに違いない。だが、同時にそのような村人たちの態度が戦争を支えていたことを、やはり忘れるわけにはいかないのだ。悠一が高等小学校にいた頃、へ軍当局から全国の各市町村長に命令して、学童たちが受験するやうに推薦制度で応募させる手段

を取つてゐた」と言う。村長や小学校長が悠一を幼年学校に推薦したのは、まさにこのような国策に対応したものだつたのである。もちろん村から戦場へと送り出されたのは悠一に留まらな。他の多くの青年たちも赤紙によつて召集され、兵卒として戦場へと送り出されていった。シベリア帰りでへすべての宗教を否定すると云ひ張り、へ封建時代の残滓であると同時に宗教的に画一された姿を持つ墓に詣るのは、彼の主義に反する」という与十もまたそのような青年に他ならない。与十は悠一と同年配であるはずだが、その与十から少年時代に一緒に遊んだ幼馴染としての悠一の姿が語られることは無い。おそらく与十や他の少年たちにとって、陸幼に入學して将来は将校になるような悠一は親しみを持てるような存在ではなかつたのだから。実際、もし与十が悠一と同じ部隊に配属されていたら、与十は悠一の部下として友村たちとへ選擇隊長」の悪口を言い合つていたかもしれない。だが、上田元曹長から戦場での悠一の話が聞かれた時に与十の口から出るのは、へ君に、悠一ツつあんのうちの、コンクリートの門柱を見せてやりたいな」という言葉である。そこには、自らの「憧れ」を批判されたことに対するささやかな反発のようなものさえ読み取れる。へコンクリートの門柱」が建てられた当時、笹山部落においては悠一の母親についてさまざまな噂がたつていたはずだが、まだ子供だった与十にはそうした大人たちの間の事情は分からなかつたのではないだろうか。与十にとつて、へコンクリートの門柱」は単純な憧れの対象であつたのだ。初めて目の当たりにへ氣違ひへとなつた悠一を見て与十がへ興奮」したのも、

そうした気持ちの裏返しでもあったのだろう。しかしその興奮も冷め、へ兵隊の素人演芸大会があるたんび、あれ〔笹山童謡〕をうたつた……と眩いたとき、与十が悠一の心の深層に到達するまではあとほんのわずかであるようにも思える。

先述したように、この小説は発表された当時「軍人」或いは軍国主義的風潮に対する風刺として受け止められた。中村光夫はそのような見方に収まらない秀逸な読みを示した一人だが、その中村さえも「軍人たちはすでに戦争中から気違いだった」などと断言していたのである。しかし、この小説が批判しているのは、「軍人」或いは陸軍将校を「気違い」と断じて、それ以上の想像力を持つとうとしない態度そのものである。悠一が「遥拝隊長」と揶揄されるような存在になった背景には、立身出世という近代日本を動かしてきた欲望があった。そしてこれまで述べてきたように、村人たちも悠一母子にそれを咬してきたのである。

もちろん、だからと言って悠一の加害者性が払拭されるというわけではない。そうではなく、「加害者」であるとされた陸軍将校の被害者性に思いを馳せることによって、「被害者」であるとされた「庶民」の加害者性にも目を向ける契機となることこそが重要な²⁴⁾だ。近年の占領史研究では、東京裁判は日本の保守勢力とGHQが共同して戦争責任を陸軍の軍人に押し付け、それによって天皇を免責した場であったということが明らかにされている。保守勢力にとっては「国体護持」のため、GHQにとっては円滑な占領政策を遂行するために天皇制が必要とされたのである。そして「庶民」もまた戦争責任を軍人に押し付けることで自己を免責

したという点では、保守勢力やGHQの「共犯」たることを免れない。しかしそのことに、いったいどれほどの人が自覚的だった²⁶⁾だろうか。

「逆コース」が問題とされ、また戦前のような時代に戻ることが憂慮されていた時代にこの小説が問うていたのは、守るべき「戦後」という前提そのものである。果たして日本人は守るべき「戦後」を始められていたのだろうか？ 果たして「戦前」や「戦中」は本当に終わっているのだろうか？ そのことを問うことなしに、「逆コース」に反対するなどと言っても空々しいだけなのだ。無論それは一九五〇年代の問題であるだけでなく、この小説を読む私たちの現在の問題でもあるはずである。

注(1) 記事の内容は公職追放の解除といった政治的なものばかりでなく、チャンバラの隆盛や軍艦マーチの復活などといった時代全体の復古的な傾向を揶揄したものだった。三年後の一九五四年に公職追放を受けていた正方松太郎が読売新聞社主に復帰しているのは皮肉なことである。なお、逆コースに関しては吉田裕「戦後改革と逆コース」(吉田裕編『日本の時代史26』吉川弘文館、二〇〇四・七)などを参照。

(2) 「文芸時評」(『朝日新聞』一九五〇・二・十九)

(3) しかもその際、悠一のモデルであるとされる陸軍将校から戦地で井伏が受けた仕打ちが持ち出されるのが常であった。たとえば「山椒魚・遥拝隊長」(岩波文庫、一九五六・一)の解説で河上徹太郎は「主題はおそらく現地を見た彼らの暗愚と狂信なのである」としている。「彼ら」とはもちろん軍人(陸軍将校)のことである。

(4) 「最近の井伏氏」(『現代日本文学全集41』筑摩書房、一九五三・十二)

- (5) 「井伏鱒二論(二)」(『文学界』一九五七・十一)
- (6) 以後はこの改稿後の本文が流通していくこととなる。ちなみに、初刊本に取められる際にも若干の改稿がなされているが語句の修正などに留まっておられ、特に言及する程のものではないと思われる。本稿で「改稿」という場合、それは改定新版において行われたものを指している。
- (7) 東郷克美「井伏鱒二素描——「山椒魚」から「選拝隊長」へ」(『日本近代文学』第五集、一九六六・十一)
- (8) 相原和邦「選拝隊長」の構造と位置」(『近代文学試論』第十号、一九七二・九)
- (9) 相原前掲論文。
- (10) 「井伏鱒二「選拝隊長」論——「言葉」の戦争」(『成城国文学』第十一号、一九九五・三)
- (11) 「大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録」第七号、一九八九・三
- (12) 「庶民における意識の不变」(『現代国語研究シリーズ11』一九八一・五)
- (13) 廣田照幸「陸軍将校の教育社会学史——立身出世と天皇制」(『世織書房』一九九七・六)
- (14) それが家の大改築とともに、(案外ばかりにならない)嫁ぎを得ていたはずの一家がお袋ひとり悴ひとりの貧世帯)になった一因であるとも考えられる。
- (15) 「立身出世主義」(日本放送出版協会、一九九七・十二)
- (16) 「選拝隊長」(『解釈と鑑賞』五九巻六号、一九九四・六)
- (17) 「日本人と母」(東洋館出版社、一九七一・三)。また、村田晶子「戦時期の母と子の関係」(赤沢史朗・北河賢三編『文化とファシズム』日本経済評論社、一九九三・十二)も参照。
- (18) 「選拝隊長」論」(長谷川泉・鶴田欣也編『井伏鱒二研究』明治書院、一九九〇・三)
- (19) 「選拝隊長」考——井伏鱒二における他者と共同体(鶴田欣也編

- 『日本文学における「他者」』新曜社、一九九四・十一)
- (20) 「価値の社会学」(岩波書店、一九七二・八)
- (21) 「戦争中は手当も充分にあつたので、親子で内職の傘張りなどしなくても悠一のうちには暮らして向きに困らなかつた。だが、一九四六年二月の軍人恩給停止によって、旧軍人やその遺族たちの多くは非常に厳しい生活状態に置かれることとなつたのである(木村卓滋「復員」前掲『日本の時代史26』参照)。
- (22) 初刊本では「行きすぎ」が「出しやばり」となっていた。
- (23) 「選拝隊長」(『解釈と鑑賞』五〇巻四号、一九八五・四)
- (24) 杉浦明平「庶民文学の系譜——井伏鱒二について」(『午前』一九四九・二)に代表されるように、井伏作品を「庶民」の文学として位置づける論は数多い。だが、少なくとも戦後の作品においては、「庶民」は決して九と肯定されていないことに注意すべきだろう。
- (25) 吉田裕「昭和天皇の終戦史」(岩波書店、一九九二・十二)、ジョン・タワ「敗北を抱きしめて」(岩波書店、二〇〇一・五)などを参照。
- (26) 戦後、「だまされた」という意識を抱いた「庶民」が少なからずいたことはよく知られている。だが、吉見義明が的確に指摘するように「そこではだまされた者の主体的責任という問題は本来避けて通れない」はずであり、しかも戦時中においては、だます者とだまされる者が常に画然と分かれていたわけでもなく、「戦争に参加し協力する限り、民衆もだます側にはしばしば立っていた」のである(『占領期日本の民衆意識』思想』八一号、一九九二・一)。また、吉見義明「草の根のファシズム」(東京大学出版会、一九八七・七)も参照。

*本文の引用は「本日休診」改訂新版(文藝春秋新社、一九五一・九)および初刊本を底本とした「井伏鱒二全集14」(筑摩書房、一九九八・六)による。また、旧字は適宜新字に改めた。